

人間と
自然資源
第49回

江戸庶民の 信仰と行楽の地 相州大山

古田尚也

— UCN日本リエゾンオフィスマネージャー —

現在は気軽な首都圏の観光地である大山。江戸時代は信仰と行楽の定番周遊コースだった。日本遺産登録やミュージランガイドの掲載によって、再びその歴史が脚光を浴びるようになってきた。

撮影 ● 古田尚也

雨に濡れた木々と参道は神秘的な靈気を感じさせる。

ミシュランに掲載された
日本遺産「大山」

大山は丹沢山地の東麓にあり、神奈川県の伊勢原市、秦野市、厚木市の境に位置している。標高は1252mとそれほど高いわけでもないが、三角形の美しい独立峰の山容が印象的だ。

大山は別名「雨降山」と呼ばれるなど、雨乞いや五穀豊穡、商売繁盛などを願うため、古くから山岳信仰の対象として栄え、特に江戸時代には関東一円から広く信仰を集めたという。第二次世界大戦後の1965年（昭和40）には丹沢大山国定公園にも指定され、高度成長期における首都圏近郊の手軽な行楽地としても多くの観光客を集めてきた。

しかし、こうした大山も、近年は観光客数の減少や日帰り客比率の増加によって地元経済が振るわずに苦しみようになってきた。また、年末年始やゴールデンウィーク、秋の紅葉シーズンといった特定時期に観光客が集中して大混雑する一方で、閑散期にはピーク時の2〜3割程度まで観光客数が減少するなど、季節変動が大きいことも課題となっていた。

年の悪循環を打ち破るための光も見えてきている。2015年（平成27）に刊行された『ミシュラン・グリーンガイド・ジャポン』で大山阿夫利神社からの眺望が二つ星、大山が一つ星を獲得した。これによって外国人観光客が増えてきた。

また、同年10月には大山ケーブルカーがリニューアルされ、新型車両が導入されるなど快適性もアップした。さらに、2016年には大山詣りを巡る歴史的ストーリー「日本遺産」に認定されるなど、その歴史や文化の持つ観光資源と



1 大山登山の前に登拝者が精進潔斎した良辨滝（ろうべんたき）。こうした滝がいくつも残され、浮世絵などにも描かれている。2 下社から山頂に向かうつづら折りの道には丁石が置かれていて、あとどれくらいで山頂に達するかがわかる。3 登拝記念の石碑がいたるところに置かれている。

しての潜在的な魅力にも光があたってきた。

雨が引き立たせる
霊山の神秘的な気配

確かに、大山はその中腹の標高約700mにある大山阿夫利神社

だ。つづら折りの道は先が見えない。しかし、大山の場合、曲がり角を曲がるたびにハッと息をのむような美しく荘厳な景色が立ち現れ飽きさせない。

曲がり角のところどころには、頂上まであとどれくらいかが記された丁石が置かれており、これも山頂までの山道を歩き続ける励みとなる。

大山はその別名である阿夫利の名の由来であるところの「雨降り」が示すように、雲に覆われ雨が降ることが多い山なのだ。雨の山登りはふつう嫌なものだ。しかし、大山に限っては、雨の日に歩くのも悪くないように思える。雨に濡れることで、参道の石の黒色と森の緑の色が一層その濃さを増して輝き、美しさを増すように思えるからだ。

江戸庶民の信仰と
行楽の山

この大山に対する信仰の始まりは不明だが、奈良時代には大山寺や現在の日向薬師などが開かれ、平安時代にまとめられた「延喜式神名帳」には大山阿夫利神社の名が記載されていることから、少なくともこのころにはすでに信仰



6 両脇にお土産物屋が並ぶ「こま参道」。7 近年新調された大山ケーブルカーの車両。



4 大山名物のお土産はこの「大山こま」。金回りが良くなるという縁起物。
5 「昔はたくさんの講の参拝者が泊まっていた」という話をしてくれた宿坊のおかみさん。



参道沿いにはさまざまな講が建てた、たくさんの石碑がみられる。





標高約700mの場所にある大山阿夫利神社の下社。江戸時代には大山寺がこの場所にあった。ここまでケーブルカーで上がることができる。

ができる。

江戸時代に隆盛を極めた大山信仰も、明治の神仏判然令に際しては例にもれず大きく混乱した。大山寺は取り壊され、その跡に大山阿夫利神社の下社が作られた。

しかし、明治維新後に神道化すると同時に、宿坊等修験道の遺産をほぼすべて失ってしまった九州の英彦山などと違い、大山の場合には御師が先導師と名を変え、神道化しつつその伝統を継承していたため、幸いにも信仰登山の伝統や宿坊などがその後も残された。

しかし、こうして明治維新を乗り越えて継承されてきた講や信仰登山の伝統も、時代の流れで徐々に失われつつあるのだという。

「昭和40年代くらいまでは、たくさんの方々がこられて、お泊まりになって楽しんでいかれました。最近では、講でこられる方はとても少なくなりましたね」と、大山ケーブル駅近くの宿坊のおかみさん。

それぞれの宿坊の敷地は、講の所在地とその名称が刻まれた玉垣で囲まれていて、立ち並んだ登拝記念の石碑や石垣に埋め込まれた数多くの石板が往時の繁栄を物語っている。よく見ると江戸の河岸

や火消し、職人等の講によって建てられたものも多い。

数は減ってしまったとはいえ、大山には現在でも宿泊可能な宿坊も20軒ほど残されており、食事だけを提供する所もある。こうした宿坊では、大山の名物である豆腐料理がふるまわれる。参道のお土産物屋では、江戸時代からの人気のお土産品「大山こま」がたくさん並ぶ。

大山から江の島を巡る 江戸庶民の行楽

大山は、首都圏から近いこともあり、現在では基本的に日帰りの観光地となっている。しかし、時には江戸時代の庶民の大山詣りに思いをはせながら、大山に登るだけでなく、宿坊に泊まり、そして江の島や金沢八景等を周遊してみたいだろうか。

落語「大山詣り」を聞き、浮世絵に描かれた大山や江の島、金沢八景を眺めながらこれらの場所を巡れば、きっとこれまでとは違う風景が見えてくるのではないだろうか。

謝辞 ● 本稿に関する研究は科研費(18K11876)の助成を受けた。

Naoya Furuta

大正大学地域構想研究所教授。
東京大学大学院農学生命科学研究科
博士課程単位取得退学。
三菱総合研究所を経て、
2009年よりIUCN(国際自然保護連合)の
日本オフィスにおいて生物多様性に関する
国内外の政策展開に従事する。



1 元祖海苔羊羹が有名な江の島の老舗「中村屋羊羹店」。2 江島神社の奥津宮。3 江の島名物「しらす丼」。



の地となっていたことは確かなようだ。

その後、修験道が栄えて大山阿夫利神社の別当寺となった大山寺は、鎌倉時代と室町時代を通じて幕府の庇護を受けて栄え、さらに戦国時代には小田原北条氏の支配下に入ったのだという。

1590年(天正18)に豊臣秀吉が北条氏を滅ぼした戦いで、大山の修験者たちは北条側について戦った。このことから、江戸時代に入ると徳川家康は修験者の武装解除のために山内改革を行い、彼らは下山させられることになる。

こうして下山させられた修験道の信者たちが大山の麓で御師となり、宿坊や土産物屋を営みながらその後関東一円に大山信仰を広める原動力となっていたのだという。

江戸時代、大山信仰は、関東一円をはじめ、静岡、山梨、長野、新潟、福島にも広がり、最盛期には100万軒を超える檀家があったという。江戸の人口が100万人のころ、年間20万人もの参拝者が訪れる人気ぶりだったというから驚きだ。

各地から大山に向かうための道は「大山道」と呼ばれた。雨降りの神様ということから農民のほか、

鳶や大工、火消し、河岸の人々などからの信仰も篤かったという。

江戸時代における大山詣りの様子は、古典落語の「大山詣り」などからもうかがい知ることが出来る。

こうした江戸時代における大山の人氣は、大山が関東一円どころからもその姿を望むことができたという地理的特性のほか、同様に人氣のあった富士詣りでは、少なくとも7日間の日程と箱根の関所を通るための手形が必要であるのに対し、大山詣りでは、帰りがけに江の島や金沢八景を経由しても江戸から3〜4日の行程で済むことも人氣の理由であったのだという。つまり、靈験あらたかでありながら、厳しい修行や戒律を伴わない、気軽な信仰と行楽を兼ね備えていたことが大山詣りの人氣の秘密だったようだ。

数多くの講で栄えた 宿坊や麓のまち

大山詣りは、富士詣りなどと同様に、通常同じ職種の職人同士や町内会を単位とする「講」を組織して行われた。大山の麓には、こうした講を受け入れる宿坊が数多く作られた。今でも大山ケーブル駅近くでこうした宿坊を見ることが